

損保 2（問題）

【 第 I 部 】

問題 1. 次の文章は、ある損害保険会社に勤務する S 氏と T 氏の会話であり、損害保険会社の第三分野保険の責任準備金について話しているものである。これを読み、次の（１）～（３）の各問に答えなさい。

（１） 2 点 （２） 2 点 （３） 1 点 （計 5 点）

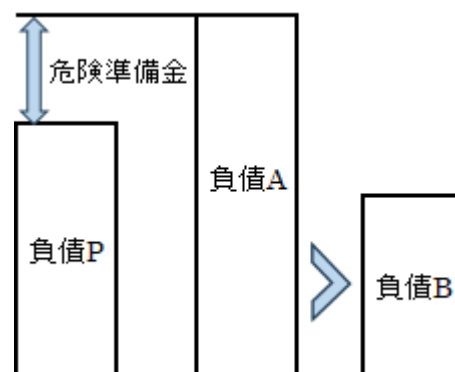
S 氏：決算において、第三分野保険については、危険準備金を積み立てるか評価する必要がありますが、どのように計算すればよいのでしょうか。

T 氏：そうですね。告示においてストレステストとして計算方法が定められており、保険事故発生率について、予定発生率、危険発生率 A、危険発生率 B の 3 種類で計算した保険金の将来の支出額の累計額（以下、それぞれ「負債 P」「負債 A」「負債 B」という）の大小関係を比較し、負債 A が負債 P を上回る場合に危険準備金を積み立てます。

なお、危険発生率とは、テスト実施期間の各年度において設定される保険事故発生率であり、危険発生率 A は通常の予測（ ① ）でリスクをカバーするもの、危険発生率 B は通常の予測（ ② ）でリスクをカバーするものです。

S 氏：だとすると、負債 A は右の図のように必ず負債 B を上回りますよね。そうであれば、負債 A と負債 P のみを計算して比較すればよいのではないのでしょうか。

T 氏：確かにそう言えるのかもしれませんが。ですが、負債 P が負債 A、負債 B の両方を下回る場合には、負債 A－負債 B を危険準備金として積み立てたうえで、負債十分性テストを行うこととなっており、そのために負債 B の計算も必要となっています。



S 氏：なるほど。異常危険準備金や危険準備金は（ ③ ）という役割があるので、そうではない部分については普通責任準備金として積み立てることになるのですね。ちなみに、第三分野保険の全ての契約でこの計算を行わなければならないのでしょうか。

T 氏：いいえ、（ ④ ）などについては計算の対象外とすることが告示に定められています。

（１） 空欄（ ① ）、（ ② ）に最もよくあてはまる語を次の選択肢の中からそれぞれ 1 つずつ選び、ア～エの記号で答えなさい。

ア：を超える範囲 イ：を下回る水準 ウ：の範囲 エ：の 2 倍の範囲

（問題 1. は次のページにつづく）

(問題 1. つづき)

- (2) 空欄 (③) にあてはまる、異常危険準備金や危険準備金を負債として積み立てる目的について簡潔に説明しなさい。

【100 文字以内】

- (3) 空欄 (④) にあてはまる、第三分野保険に係るストレステストを行わなくてよい場合について、具体的な例を 1つ挙げなさい。

【100 文字以内】

問題 2. 火災保険と自動車保険の 2 種目だけを取り扱っている損害保険会社 X においては、同社のリスク管理における保険引受に係るリスク量 R を直前の年度の既経過保険料から算出しており、具体的には火災保険の既経過保険料 p と自動車保険の既経過保険料 q を用いて次のように計算しているという。

- ・ 火災保険のみに係るリスク量 : $0.1p$
- ・ 自動車保険のみに係るリスク量 : $0.1q$
- ・ 保険引受に係るリスク量 (火災保険 + 自動車保険) : $R = R(p, q) = 0.1 \sqrt{p^2 + q^2}$

直近年度における既経過保険料が $p = 10,000$ 、 $q = 1,000$ であったとして、次の (1) から (4) の各問に答えなさい。

(1) 1 点 (2) 1 点 (3) 1 点 (4) 3 点 (計 6 点)

- (1) この会社は、火災保険に係るリスクと自動車保険に係るリスクとの相関について、どのような前提を置いているか。リスク量の算式から類推し、次の選択肢の中から 1 つ選び、ア～ウの記号で答えなさい。

ア : 正の相関がある イ : 負の相関がある ウ : 相関がない

- (2) 火災保険に係る既経過保険料 p が直近年度と比較して 500 増加したときの、保険引受に係るリスク量の増加率 (※) を求め、最も近いものを次の選択肢の中から 1 つ選び、ア～エの記号で答えなさい。

(※) 既経過保険料が増加した後のリスク量が、直近年度のリスク量と比較して $(1 + \alpha)$ 倍になったとき、この α を「増加率」というものとする。

ア : 0.2% イ : 0.6% ウ : 2.7% エ : 5.0%

- (3) 自動車保険に係る既経過保険料 q が直近年度と比較して 500 増加したときの保険引受に係るリスク量の増加率を (2) と同様に求め、最も近いものを次の選択肢の中から 1 つ選び、ア～エの記号で答えなさい。

ア : 0.2% イ : 0.6% ウ : 2.7% エ : 5.0%

- (4) (2) および (3) の結果から、既経過保険料が同額増加したとしても、状況によってリスク量の増加率が異なることが分かる。そのようになる理由を説明しなさい。解答にあたっては、算式的な説明、具体的なリスクの状況と結び付けた説明など、あなたが述べやすい方法で説明しなさい。

【200 文字以内】

問題 3. 次の (1) ~ (3) の各問に答えなさい。

各 4 点 (計 12 点)

- (1) モデルガバナンスにおける文書化について、文書に含まれていることが望ましい内容および文書化が重要となる理由を簡潔に説明しなさい。

【300 文字以内】

- (2) 会社全体の経済資本（リスク量）を事業領域や商品等に配賦する手法のうち、経済資本比例による配賦について、その手法の概要とメリット・デメリットについて説明しなさい。また、そのデメリットを一定程度解消することができる配賦手法を 1つ挙げなさい。

【300 文字以内】

- (3) 損害保険会社が積み立てる支払備金には普通支払備金と IBNR 備金がある。そのうちの IBNR 備金の内容と意義について簡潔に説明しなさい。意義については、仮に損害保険会社が普通備金のみを積み立てて IBNR 備金を積み立てなかった場合にどのような不都合が生じるか、という観点から説明しなさい。

【300 文字以内】

問題 4. 次の (1) ～ (4) の各問に答えなさい。

(1) 5 点 (2) 4 点 (3) 4 点 (4) 4 点 (計 17 点)

(1) 次の文章は、2025 (令和 7) 年度の税制改正で受け入れられた、火災保険等に係る異常危険準備金の改正の概要を簡潔に説明したものである。これを読み、次の①～②の問に答えなさい。

＜本件改正の概要＞

- ・火災保険等に係る (A) 積立率の (B) 措置を延長する。
- ・各保険区分の取崩単位を一本化するとともに、取崩基準損害率を (C)。

① 上記の空欄 (A) ～ (C) に当てはまる最も適切な語を次の選択肢の中から 1 つずつ選び、ア～カの記号で答えなさい。

ア：有税 イ：無税 ウ：割増 エ：割引 オ：引き上げる カ：引き下げる

② 本件改正が要望された背景を簡潔に説明しなさい。

【200 文字以内】

(2) 損害保険会社が、短期国債やコマーシャルペーパーへの投資といった短期運用を行う意義を説明しなさい。

【400 文字以内】

(3) 損害保険会社が資産管理を堅実に実施すべき理由と、自己査定を厳正に実施する意義について説明しなさい。

【400 文字以内】

(4) 2025 年 3 月 (2024 年度の終盤) に、「防衛特別法人税」が創設され、これにより 2026 年度以降の法人実効税率が引き上がることとなった。2024 年度の損害保険会社の決算 (※ 1) においては、この実効税率引上げの影響で、税引後利益が増加することも多かった。なぜ税引後利益が増加したのか、会計上利益が計上されることとなる過程も含めて説明しなさい。解答にあたっては、「準備金」「将来減算一時差異」の語を必ず用いなさい (※ 2)。

【400 文字以内】

(※ 1) ここでは、日本国内の損害保険会社における、我が国で一般に使用されている損害保険会計の基準に従った決算を考える。

(※ 2) これらの語の意味を説明する必要はなく、必要であれば複数回用いてもよい。また、「準備金」については「○○準備金」の形で用いてもよい。

問題 5. 次の (1)、(2) の各問に答えなさい。

(1) 6 点 (2) 4 点 (計 10 点)

(1) 分割払契約の未経過保険料は、既経過保険料割合（全保険期間の保険料に対する既経過保険料の比率）が、一括払の既経過保険料割合と一致するように既経過保険料を求め、すでに計上済の保険料から控除することによって算出するという考え方に基づいている。次の①～③の場合について、2025 年 3 月末を計算基準日とした未経過保険料を求めなさい。解答にあたっては次のとおりとしなさい。

- ・経過は保険始期の翌月の月初（1 日）から開始するものとする。
- ・経過の単位は、1 か月が一律 30 日であるとみなした月単位とする。
（日数単位で計算する必要はない。）
- ・計算対象となる保険契約のリスクは保険期間を通じて均等に分布しているものとみなす。
- ・記載されているもの以外に、計上済または計上予定の保険料はないものとする。
- ・計算結果が整数にならない場合は、小数点以下第 1 位を四捨五入して整数で解答しなさい。

① 保険始期 2024 年 11 月 4 日、保険期間 1 年。

保険料払込方法は 4 回均等払であり、具体的な保険料計上の状況は次のとおり。

項目	計上（予定）月	計上の状況	金額
初回保険料	2024 年 11 月	計上済	30
2 回目保険料	2025 年 2 月	計上済	30
3 回目保険料	2025 年 5 月	計上予定	30
4 回目保険料	2025 年 8 月	計上予定	30
保険料合計	—	—	120

② 保険始期 2024 年 12 月 1 日、保険期間 1 年。

保険料払込方法は 4 回順月払であり、具体的な保険料計上の状況は次のとおり。

項目	計上（予定）月	計上の状況	金額
初回保険料	2024 年 12 月	計上済	30
2 回目保険料	2025 年 1 月	計上済	30
3 回目保険料	2025 年 2 月	計上済	30
4 回目保険料	2025 年 3 月	計上済	30
保険料合計	—	—	120

（問題 5. (1) は次のページにつづく）

(問題 5. (1) つづき)

③ 次の(i)および(ii)の 2 つの契約の合算

(i) 保険始期 2024 年 11 月 15 日、保険期間 1 年。

保険料払込方法は 12 分割 10 回払であり、具体的な保険料計上の状況は次のとおり。

項目	計上（予定）月	計上の状況	金額
初回保険料	2024 年 11 月	計上済	30
2 回目保険料	2025 年 1 月	計上済	10
3 回目保険料	2025 年 2 月	計上済	10
4 回目保険料	2025 年 3 月	計上済	10
5 回目保険料	2025 年 4 月	計上予定	10
6 回目保険料	2025 年 5 月	計上予定	10
7 回目保険料	2025 年 6 月	計上予定	10
8 回目保険料	2025 年 7 月	計上予定	10
9 回目保険料	2025 年 8 月	計上予定	10
10 回目保険料	2025 年 9 月	計上予定	10
保険料合計	—	—	120

(ii) 保険始期 2024 年 9 月 9 日、保険期間 1 年。

保険料払込方法は 8 回順月払であり、具体的な保険料計上の状況は次のとおり。

項目	計上（予定）月	計上の状況	金額
初回保険料	2024 年 9 月	計上済	10
2 回目保険料	2024 年 10 月	計上済	10
3 回目保険料	2024 年 11 月	計上済	10
4 回目保険料	2024 年 12 月	計上済	10
5 回目保険料	2025 年 1 月	計上済	10
6 回目保険料	2025 年 2 月	計上済	10
7 回目保険料	2025 年 3 月	計上済	10
8 回目保険料	2025 年 4 月	計上予定	10
保険料合計	—	—	80

(2) 上記 (1) の未経過保険料の算出方法が、1/12 法、1/24 法のどちらであるかを答えなさい。そのうえで、未経過保険料算出における 1/12 法と 1/24 法のそれぞれの考え方について、それぞれの方法をとることが適していると考えられる状況とその理由を含めて説明しなさい。

【400 文字以内】

【 第 II 部 】

問題 6. ある損害保険会社では、責任準備金および支払備金を経済価値ベースで評価することを検討している。一部の保険契約に係る経済価値ベースの責任準備金および支払備金については、次のとおり計算したいと考えている。

＜責任準備金＞

我が国の現行の会計基準に基づいた未経過保険料、または当該未経過保険料に簡単な調整を加えたものとする。

＜支払備金＞

我が国の現行の会計基準に基づいた支払備金（普通支払備金および IBNR 備金）、または当該支払備金に簡単な調整を加えたものとする。

これらのような、現行の未経過保険料・支払備金またはそれらに簡単な調整を加えたものを、経済価値ベースの責任準備金・支払備金であると見なすことが妥当といえるのは、どのような場合か。保険契約の内容や外部環境などの観点から整理し、実際にそのように見なすことを検討するにあたって考慮すべき事項について所見を述べなさい。

なお、我が国において 2025 年 7 月 23 日に公布されたソルベンシー規制（新規制）に固有の内容や計算方法については論じなくてよい（必要であれば簡潔に触れてもよい）。

【1,000 文字以内】

（ 1 0 点）

問題 7. 近年、世界的に雹災、干ばつ、森林火災等の自然災害が増加しており、モデリング会社によるリスクモデルの開発も進められている。ある損害保険会社では、従来把握していなかった当該リスクを定量的に評価するために、リスクモデルの導入を選択肢として検討を始めている。適切な統合リスク管理を行うために検討すべきと考えられる点を挙げ、アクチュアリーとしての所見を述べなさい。

【1,500 文字以内】

(1 5 点)

問題 8. 市場競争の中で健全性を維持しながら収益性を向上させていくことが、損害保険会社の経営上の重要な課題となっている。損害保険会社の健全性の維持と収益性の向上とが、それぞれどのような観点から求められているのか説明しなさい。そのうえで、両者の関係について、健全性や収益性に関連する経営指標に言及しつつまとめ、上記下線部の課題をどのように達成していくべきか、所見を述べなさい。言及する経営指標は、一般的に使用されている指標の中から、論じようとする内容などに応じて自由に選択してよい。ただし、収益性に関連する指標のうち「損害率」については論じなくてよい（説明のために必要であれば簡潔に触れてもよい）。

【2,500 文字以内】

（ 2 5 点）

以 上